レジャーと繊維

小 口 登

1. レジャー私見

古代ギリシャの哲学者アリストテレスは、人間の究極の目標を「理知」と「幸福」と「レジャー」に置き、そのためには充分の時間をもつことが必要であると説いているが、単にレジャーが余暇と解釈されているのは必ずしも正しくないようで、レジャーとはギリシャ語の「skole」或は英語の「School」の意味もあって、「自分が自由に使える時間」と言う意味と、「学問や訓練」と言う意味を兼ねており、積極的な自己練成の意味があると言う。しかるにわれわれはレジャーを余暇と訳し、リクリエーションや明日の勤務の為に休養などと結びつけており、レジャーなるものの内容は東西それぞれ歴史や風土により異なることは容易に想像がつく。日本でも古くから余暇と言いつつ閑と言いつつ余った物理的時間のことを意味したのではなく、余技の余であり閑静の閑であり、芸域に達する前駆を意味している。したがって、レジャーは東西それぞれ個々の意味と歴史を有するもので、現代人が単にレジャーを経済的或は産業的側面のみと結びつけて、いろいろの結論や推定を出して議論するのは、明らかに偏見である。人間の一生に与えられた全時間を考えるとき、睡眠や食事などに要する生理的に不可欠な時間と、生存を続行するに必要な勤務時間があり、残りが余暇となるが、この余暇を如何にして生み出し、如何に過ごし、如何なる目的を達成するかは、余暇哲学であり東西の時代と民族で異なるものであろう。余暇を生み出す為に奴隷制度、工業技術、游牧生活、機械の採用、コンピューターの使用などを選び、生じた余暇は旅行、スポーツ、趣味、交友、……などいわゆるレジャーに使用する。

元来西欧人は狩猟民族或は游牧民族であるから、余暇の生み出し方も、「他民族征服」、「奴隷制度」、「政治・学問・宗教の階級制度」を利用する歴史を有し、不平等且つ差別的因子を有するのに反し、東洋民族特に日本人は農耕漁民族であるために、基本的には農閑期や冬期を利用する季節型である。漁民も古くは遠洋漁法では

ないから、同様に季節型で、万人平等である。従って西欧人のレジャーは計画的且つ意図的であるのに反し、日本人は週期的で待っていればレジャーがやって来た。このように余暇の生み出し方に相違のあったことが現代日本の余暇確保の仕方に影響し、日本人は計画的レジャーが下手だと言われる原因ではないだろうか。兎に角遊び下手なのであり、余暇開発も盛であるが余暇管理、余暇産業、余暇商品の予測には失敗があったり、思わぬものが長続きする。日本で20年以上流行し続けていて欧米に全く入らないパチンコなどどう分析されているのだろうか。

日本人の余暇は季節的で豊漁豊作に関係するので、温暖で二耗作が可能な西日本よりも冬の長い東北の方に庶民に密着した民謡、舞、民芸品、豊年踊や盆踊りなどは豊富であるといわれ、西日本は豊かな農業をもつためむしろ武家社会より流れ出た伝統的で精選された文化遺産（余暇遺産）が多い。このように祖先のレジャーは勤労や休養・祭りの特色と結び付いて、短歌、和歌、民謡、民話、民芸、踊り、文学、絵画、木彫り、焼物、人形、民芸品、等……実に種類が豊富で、集団で楽しみ合い、皆が仲間に入る型のものが多い。驚くべきことには料理、活花、茶、香、など日常生活や感覚をもレジャー化し、それに用いる皿、花器、焼物の観賞なども含めた広範囲なレジャーシステムを完成させたことであり空手、柔道など護身をもレジャー化し、活花、空手、柔道は今日海外のレジャーでも大いに受け入れられている。

これらのレジャーも明治以後の日本の近代化には多くの浮沈が見られたが、何よりも強く影響したものは欧米のスポーツの流入と芸術の紹介であったが、富国強兵と立身出世は、天皇中心の忠君愛国・滅私奉公・勤儉貯蓄、贅沢は敵となり、季節レジャーは日曜日レジャーに強制され多くの伝統レジャーは“道楽”として栄え、町の巷に定着した。第二次世界大戦すらこの“道楽”を根絶させることはできず、戦後間もなく復活し、或ものは民芸産業となり、或ものは流派をなして組織化され、テレビ、週刊紙のマスメディアに乗って栄えている。この道楽の急成長もそれを可能にしたものは経済成長であり、豊富な物資と余暇時間であったが、それらは促進させた外部要因であり、むしろ内部要因としてはそれらを受け入れる心が不変だからであろう。一方西欧より流入された日

Leisure life and textile fiber.

NOBORU OGUCHI

MITSUBISHI Rayon Co., Ltd.

三菱レイヨン株式会社 技術開発部（工博）

曜レジャーは、季節レジャーと混交し、今日見られるレジャー産業に発展し、巨大化した。この季節レジャーと日曜レジャーは、交通の発達・道路の整備、レジャー情報システムの発達により総合化され、昭和40年代に入って急成長し、特に海外旅行を発達させた。しかし昨年（昭和48年）秋の第4次中東戦争の政治的手段としてとられた石油削減と原油価格引上げのいわゆる石油ショックは日本の受け止めの不適なことも手伝い、又昨年に特に頻発した日本も含め世界的石油コンビナートの事故が重なり、レジャー産業は勿論全産業が原料不足と価格上昇で今や大混乱を生じ、先の見通しの全くたない時点に立っている。改めて日本列島改造・海外進出、資源エネルギー問題などが問い直されている。庶民は物価上昇に恐怖を感じ、ガソリン不足も手伝い、今冬はレジャー消費に異変が生じ、大型消費レジャーは伸びず、近郊スケート場や映画音楽芝居に集中し、緊縮レジャーに急変した。レジャー産業は下降するとかわかれ、スポーツ・旅行・ファッションを通じ、繊維はレジャーと密接な関係にあるが、今後の余暇時代の予測は極めて重要であるが困難である。

2. 今後のレジャー時代

石油ショックがあってもレジャーに対する期待と実行は今後も余り変わらないものと思われる。しかし石油消費規制と総需要抑制政策、物価の異常高騰と個人所得の実質的減少などからレジャー消費も当然抑制されようが、週休2日制の定着と長期休暇取得傾向は益々テンポを早めると同時に、レジャー企業のレジャーランドに見られるいわゆる「金銭大食型レジャー機械」と「レジャー施設」を利用する消費型レジャーは減速せざるを得ず、また大衆もレジャー企業の利益志向に飽食して来ており、むしろ大衆は、自然が売り物なら更に大きい自然を求め、施設もコインにより興味やスリルを提供されるよりも、自ら参加し、実行する体育施設、総合グラウンド、キャンプ場、自転車道や音楽・遊戯など民衆の会話の場を提供する広場・文化ホールなどが求められるようになる。このような規模になるとレジャー企業としては採算的に無理で、事業の推進役としては、文部省・労働省・運輸省など各省庁がナショナル・プロジェクトとして大規模に予算化し、これに地方自治体が参加調整された広域クリエーション基地が山中にできたり、都会にはスポーツ休養施設が整備されつつある。希望ヶ丘文化公園（滋賀県）、愛知青少年公園と児童総合公園（愛知県）などが発足しており、次々と類似の計画があるが何れも数十億円以上を投ずる大規模のものである。労働省は昨年東京・中野にサン・プラザを60億円で完成させ動労青少年

の体育と休養の場を提供し、更に名古屋・大阪をはじめ全国数ヶ所に計画中である。これらは私企業では採算に合わないことと、地域住民との合意が得られないことで企業化は困難で、むしろ公的機関と地域住民との負担で建設されており、自治省では今後10年間の計画としては、グラウンド4,000、体育館5,300、プール5,000ヶ所、総事業費8,750億円と算定されている。これに環境庁は国民の休養宿泊施設を提供し、通産省の余暇情報センター、運輸省の観光情報センターがそれぞれの情報提供の役割を果たすものと考へられる。

一方一般企業も週休2日制の余暇時代の開幕に当り余暇管理対策に苦慮しているであろう。よき余暇管理は経営の成功に通ずるもので、保養所の有効利用、会員制レジャー施設への法人加入、趣味運動部への助成などを中心に活発に行われるものと思われるが、目下は石油ショックの最中であり新しいユニークな手は打たれていない。企業は余暇管理はすべきでないし又できる筈がないと言う意見は強い。しかし企業全体から考えて余暇は企業戦力となることもあり、マイナスにもなるので、野放しにすることはできない。従業員とのコンセンサスを得てなすべきことは多々ある。余暇インフォメーションの提供、チーム編成、余暇材料の共同購入、休暇取得の指導と調整など大小さまざま考へられるが、最も大切なものは余暇をどう考へるかの余暇哲学である。余暇を勤労と同等に考へる価値感の転換が必要である。

レジャーを本業とするレジャー企業も、上記ナショナルプロジェクトのレジャー施設を先取りし、公共機関ではできない高効率と民衆のレジャーに更にプラスアルファが提供されるであろう。レジャーを本業としないレジャー関連企業がレジャーを兼営することにより本業の経営にもプラスになり得るし、レジャーも利益を生むような形で（従来もこの方式が多いが）新しいレジャーが登場するものと考えられる。それは必ずしも消費型の大型レジャーばかりでなく、日本人の風土に合致した（緒言のレジャー論で述べた）趣味レジャー、民芸レジャー、〇〇道レジャーの如く季節や風土に密着し、地方色豊かなレジャーに細分化されて発展するであろう。

更に見逃せないのは今後人口構成が老齢化することと福祉型社会への移行である。人口の老齢化は明確であるが福祉型社会への移行の速さとその福祉の程度は全く未知である。政府の政策とこれを許容する民意に余程の発想の転換がもたらされない限り英国や北欧型の福祉水準に到達するのは当分不可能であると思う。さりとてすべての人の福祉が不十分であると言うのではなく、社会の動向を上手に先取りした特定の階層の人々にとっては充分行届いた（社会正義や平等からは遠いかも知れないが）

福祉社会は実現されて、散歩、遺跡観光、避暑避寒などのレジャー産業の客の主体は老人になる可能性がある。核家族化は親子夫々の経済の独立性を定着させるし、少産少死の構成する親族構造は益々シンプルとなり、経済的に恵まれる高齢者は意外と多く、これらの消費はレジャー消費が主体であるから将来のレジャー支出の一つの柱になるであろう。

3. 繊維とレジャー

余暇を行動によって過ごす場合、何かしらの商品を消費する。ボーリングであれば、ボール、靴、ボーリング施設、床のカーペット、…などがありその上に服装がある。そのようにして考えるときレジャーが必要とし消費する商品の中には繊維を使用した繊維製品は意外と多いと思う。特にレジャーウェアはファッション性の強いものである。レジャーウェアまで含めると余りにも広範囲となりまたこの稿の目的でもないので省略し、特殊な繊維材料がどんなところに使用され、どんな性能を発揮するかをまとめてみたい。

〔難燃性繊維〕

理想的な性能と適正な価格を有する難燃性繊維があれば一般衣料にも用途が広いが、レジャー関係でもホテルのインテリアと寝具関係に法律規制の下に使用される。また公共機関の休暇村の宿泊設備、鉄道航空など運輸関係の内装・地下街やショッピングセンターの内装、興行娯楽や文化ホール、オートレースの不燃化、など意外と不燃化すべきところが多い。特にレジャーは物事に熱中したり、疲れて熟睡したり、休養とリラックスするためサウナ風呂などがあつたり、火災の原因も多いし、発見も遅い可能性があり特に注目される素材となる。

〔吸湿性繊維—天然繊維〕

特にレジャーに用いられる繊維として挙げるまでもないかも知れないが、スポーツ、サイクリング、登山、ハイキング、ゴルフなど汗を流したり気温の急変に対して人間の生理がよく順応するためには木綿・羊毛、毛皮など天然繊維は常に有用であり、これに耐摩性や強度を向上させるため合繊が混用される。

〔炭素繊維・ガラス繊維〕

ゴルフ用のブラックシャフトとして話題になった如くFRP用の繊維として炭素繊維は高いヤング率と比強度が重要視され、既に釣竿などにも使われようとしている。切削、研磨など加工も出来ることから今後商品化技術が急速に普及する。高度物性材料として用いられると同時に自己潤滑性があり、軽量化が顕著であるので、価格が安価になれば自転車部品、トランク・車椅子など身障者補助用具、弓道、アーチェリーの弓、釣竿、ゴルフフ

ャフト、FRPボートの骨材や舷部、オール、水上スキーなど海上スポーツの構成材料、航空関係部品やヘリコプター、グライダー、大鳳、雪上のスポーツ用品等に利用される。しかし商品から見て少量多品種生産型の工業である。音響関係の部品でも、ポータブルのレジャー用品としての要求が強いので、軽量小型化の材料として炭素繊維は重要繊維となる。なお価格と性能のバランスでガラス繊維も同様に使用される。

〔保温性衣料と伸縮性衣料〕

レジャーは室内レジャーより戸外レジャーが多く、それも、海、山、川、などで、様々の気候四季が組合せられるので、危険防止と動作の敏捷なことが要求される。従って使用される衣料は軽量保温と伸縮性が要求される。この為に新繊維が要求されるのではなく、ラミネート、キルティング、ニット化、ウレタン発泡材の使用などの加工技術を用いてかかる機能を発揮させている。必ずしも満足とは言えず、今後更に新材料と新加工法が望まれている。

〔海上用繊維〕

海洋レジャー、例えば釣、ヨット、ボート、ダイビング、水泳、水上スキーなどいろいろあるが、これらのレジャーに使用される繊維は使用中充分その機能を発揮すると同時に海難時に浮く、発見し易い、保温性、などが考慮されることが望ましく、ロープでも浮くロープと沈むロープでは作業性が全く異なる。

〔使い捨て繊維品〕

家庭生活と異なり、レジャー生活は時間を生み出すために、通常の生理や寝食を簡便にする必要があり、ワイパー、タオル、シーツ、カバー、おむつ、など使い捨てる商品が、便利さと清潔さで好まれる。人口稠密な日本ではゴミ公害として問題が多いが、商品の改良と使用者のマナーの向上と相俟って大いに使われるようになる。

4. レジャーは社会に定着するか

日照権が奇妙な権利として社会に登場し、今日当然な権利となりつつあるごとく、余暇も余暇権として考へる考へ方があり、欧米では週休2日制と1～3週間の長期休暇が定着するに従い権利化していると言う。産業界・学界・市場もこのレジャー時代の到来を充分予測し、生産管理体制・研究体制、市場開発体制等すべてを余暇時代に備える必要がある。物不足・エネルギー不足に眼を奪われているが、矢張り余暇時代は省力化が基本であろうと思う。1人当りの生産量を上げることが余暇を可能にするものである。欧米は長期休暇に加えて兵役があり、職場を離れる割合は日本より多い。レジャーにしろ、兵役にしろ職場を離れる日数が多く、離れたところで人間が行動すれば消費があり、需要が多いことになり市場が

拡大されたことになる。生産に従事している人間と消費している人間が別々である社会は奴隷社会であるが、生産している人間が同時に消費の市場を構成する社会は考へただけでも楽しい社会であり、その方向は正しい社会変革の方向ではないだろうか。本来の“隠居生活”“晴耕雨読”は立派な余暇哲学であり“小人閑居して不善を

為す”など味わいのある余暇時代の教訓である。

未経験の余暇時代を迎えるに当っては余暇は物理的時間でなく心の問題であるのでわれわれ民族個々の歴史と心を読みとって、繊維市場と繊維工業を見つめ、その上に諸外国の経験や歴史を参考にすべきである。

(昭和49年1月15日受理)

第53回紙パルプ研究委員会記録

日 時：昭和48年11月29日13:00~16:00

場 所：国立教育会館

出席者：委員長ほか約35名

テーマおよび講師：

第5回紙の基礎研究シンポジウム参加記

(東京農工大学) 大江礼三郎

第1回の紙の基礎研究シンポジウムが、イギリス製紙連合会技術部会(British Paper & Board Makers' Assoc., Technical Section)によって、1957年に“Fundamentals of Paper Making Fibres”の主題の下で開催されてから、爾後、4年目毎にケンブリッジとオクスフォードで交互に開かれてきた。その講演内容は出版されているので、愛読の方も多と思う。

1973年版は、「用途から見た紙の基礎的性質」の主題で、9月17日より21日までケンブリッジ大学で行なわれた。参加者は254名、北欧、北米の紙の研究者が一堂に会した観があった。

シンポジウムは、「紙の構造とその性質」「紙の機械的性質」「シートの性質に及ぼす諸成分の影響」「バリエーション、吸収性など原紙としての適性」「印刷適性」「紙の組織および視覚的性質」「環境条件による紙の変質」「総括」の7つのセッションについて進行した。

用途に重点をおいた主題であるが、参加者の顔触れからしても、紙の構造に関心が高く、第3日目などは、定刻を繰上げ、8時30分から紙の構造について特に討論を追加して行なった。

レーザー光線の干渉ホログラフによる紙の強度むらを研究したLyne、変形機構を熱応力的に究明したEbeling、

単繊維の破断を応力歪曲線とシンクロナイズさせてシネ・フィルムに撮影したPageなど若手研究者が、紙のミクロ的密度むらを論じたNorman、コロナ処理による紙の接着強度の向上を取扱ったGoring、視覚的品質評価の不確実性を認識論的に取上げたCorteなど諸大家に伍して、まことに活発に論議を重ねる様は、瞠目させるものがあった。Higginsによる高比重ユーカリ材の導管と印刷適性の研究は、日本へのチップ輸出に関連するものであり、Rånby, Wolpert, Trumanの合成紙、プラスチック紙に関する報告は、日本の製品をベースにしたものであった。今回は、紙の始めに遡って論じることが予定されている。

1973年国際パルプ漂白会議に出席して

ーディスプレイスメントブリーチング及び気相漂白ー
王子製紙 小出一雄

世界的な環境保全に対する要望を背景に、今回の漂白会議の中心テーマは環境保全関連技術であった。酸素漂白関係のレポートは9編に達し、全体の1/3を占めたが、目新しい報告が少なく研究としてはひとつの壁につきあたっている感が深い。

パルプ漂白排水の処理を考える場合、排水量の節減が最も重要な課題であるが、これに関連した技術として、ディスプレイスメントブリーチング(3編)とPPRICの気相漂白(2編)の報告があり、本漂白会議のハイライトになった。

さらに、今後蒸解白液中に多量の塩化ナトリウムが蓄積するような技術の開発が予想されるが、トロント大学のラブソン教授の塩化ナトリウム析出分離に関するパイロット操業報告は現実的な方法として興味があった。